

航空戦力にも鍵は「情報」

ウクライナへのF16戦闘機供与に向け、「欧州F16訓練センター」がルーマニアに設置された。これまでオランダ、デンマーク、ノルウェー、ベルギーがF16供与を表明しており、来年にはF16が実戦投入される見込みだ。これまでにウクライナは航空優勢を獲得できず苦戦してきた。反攻攻勢は思うように進んでおらず、戦線は膠着気味である。

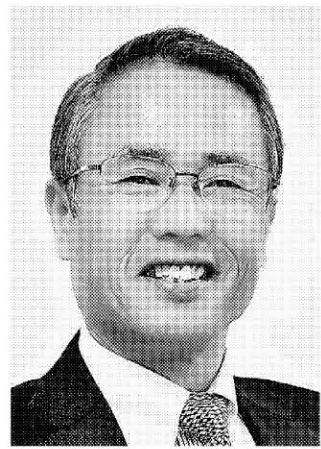
他方、ロシアは陸軍大国であるせい、航空戦力運用に関する理解は不十分だった。圧倒的な空軍戦力を持ちながら、稚拙な作戦計画、未熟な空地連携で航空戦力の利点を活かしてきていない。この未熟さに助けられ、ウクライナは地上戦を何とか進めてきた。ウクライナの戦況打開に必要なものは航空優勢であり、これなくしてロシア撃退はできない。

克服すべき3つの点

航空戦力発揮には、3つの克服すべき特徴がある。戦力構築に長期間を有すること、質は量で補うことができないこと、そして諸力の掛け算であることだ。

戦力発揮に情報は「自前」が原則

正論



麗澤大学特別教授
元空将
織田 邦男

い。戦力構築も各国の支援で何とか短縮化が図られるだろう。残りは一掛け算である。航空戦力は、情報、警戒管制、指揮統制、操縦者技量、戦術、基地防空、整備、武装、弾薬など諸力の掛け算である。どれが欠けても戦力はゼロとなる。部品一つ欠けただけでF16は鉄くずと化す。特に「情報」は戦力発揮の要である。ウクライナの反攻作戦にとって、ロシアの航空攻撃は致命的である。これをF16で封じるにはリアルタイムの空域情報が欠かせない。地雷

原、塹壕陣地などロシアの防衛ラインを崩すには、F16の対地攻撃が効果的である。これにはロシアの防空網突破が前提であるが、ロシアの戦闘機、地对空ミサイルなどの情報が入り手がなければ返り血をあびる。

F16導入により、前線のみならず指揮通信施設、司令部、後方補給基地などがピンポイントで攻撃できるようになる。だが精密攻撃にはリアルタイムの精密情報が欠かせない。ウクライナにはこの能力はない。おそらく米軍はじめNATOから情報支援を得ることになるだろう。手取り早い方法だが、情報を他国に依存するのは、もろ刃の剣だ。他国の政治的思惑に振り回されることになりかねない。戦術情報、戦術情報にかかわらず情報は自前で入手し、自国で分析することが基本である。

日本も他人事ではない。昨年12月に閣議決定された国家安全保障戦略で反撃能力の保有が明記された。防衛力整備計画には「米国製のトマホークを始めとする外国製のスタンド・オフ・ミサイルの着実な導入を実施・継続する」とある。近年の弾道ミサイルの高性能化と運用の多様化により、弾道ミサイル迎撃システムだけでは対応が難しく、反撃能力と相まって防衛する必要はある。日本への攻撃を抑止するには、反撃能力の保有は欠かせない。

先ずはトマホークを導入するようだが、これも航空戦力であり「掛け算」を克服しなければ戦力は図れない。やはり鍵は精密情報のリアルタイム入手である。

これは他人事ではない。昨年12月に閣議決定された国家安全保障戦略で反撃能力の保有が明記された。防衛力整備計画には「米国製のトマホークを始めとする外国製のスタンド・オフ・ミサイルの着実な導入を実施・継続する」とある。近年の弾道ミサイルの高性能化と運用の多様化により、弾道ミサイル迎撃システムだけでは対応が難しく、反撃能力と相まって防衛する必要はある。日本への攻撃を抑止するには、反撃能力の保有は欠かせない。

トマホークは遠距離精密攻撃が可能である。この戦力発揮には、遠距離の精密な目標情報がリアルタイムで入手できなければならぬ。攻撃後は、攻撃成果の情報を入手し、迅速に戦果を分析できなければならぬ。

日本は衛星情報、通信情報、電子情報など、戦術情報の収集、分析能力は限定的ではあるが保有している。だが、遠く離れた海外での戦術情報をリアルタイムで入手する能力はない。当面、反撃能力の行使にあたっては、米国の情報に依存した共同作戦となる。